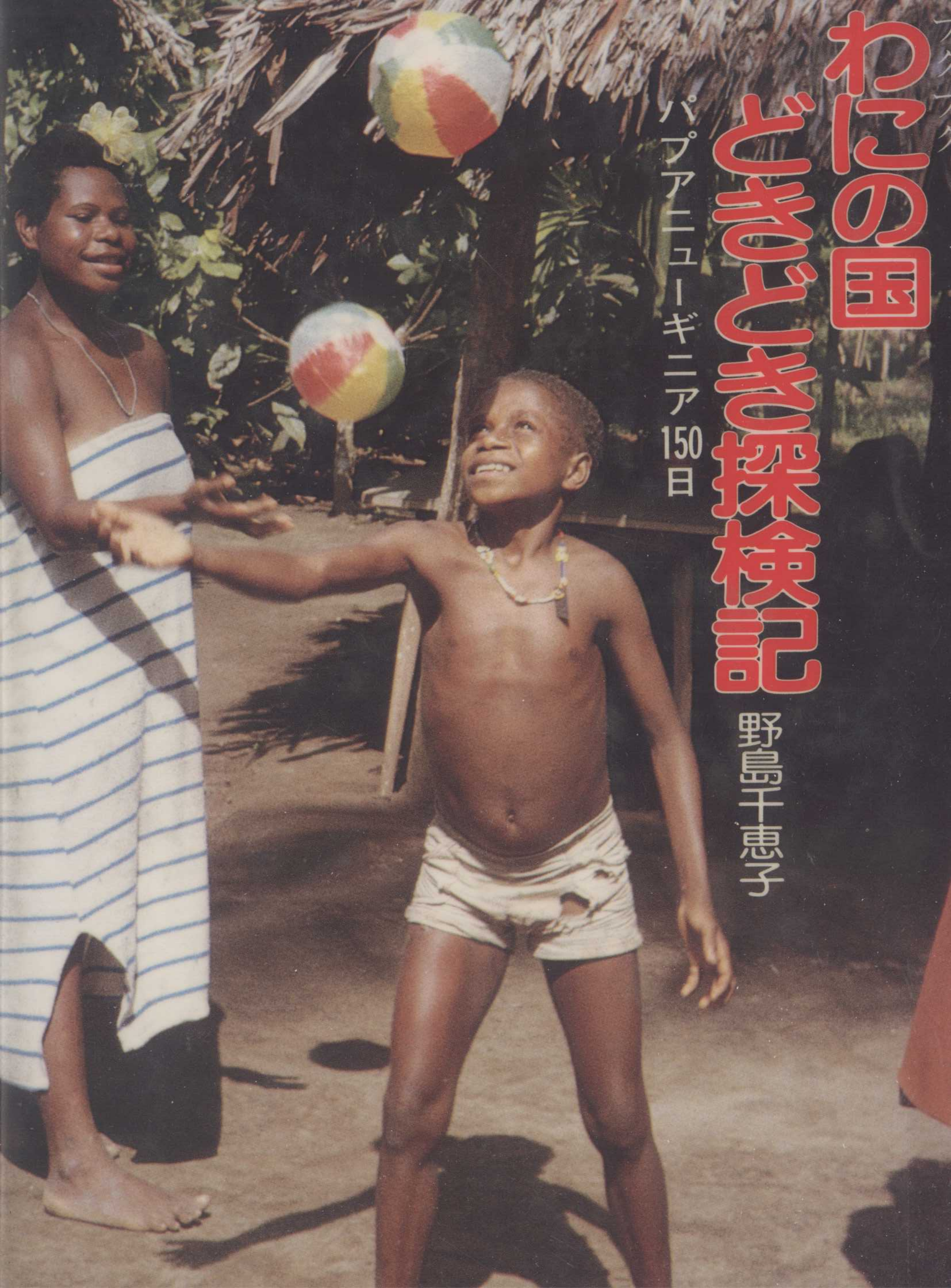

わにの国どきどき探検記

パプアニューギニア150日

野島千恵子

国どきどき探検記

野島千恵子

ん。昔の戦士の姿をみせてくれた。

（写真提供・青木修二）

ポプラ・ノンフィクション㉑

わにの国(ブクブク)どきどき探検記(たんけんき)

発行　1985年9月　第1刷©

著　者　野島千恵子（のじま　ちえこ）
発行者　田中治夫
発行所　株式会社 **ポプラ社**
〒160　東京都新宿区須賀町5
振 替　東京4-149271

印刷　株式会社須藤印刷
製本　島田製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
N.D.C.916

Printed in Japan　　ISBN4-591-02071-1

パプアニューギニアの国旗

はじめに

世界地図を開いてみましょう。太平洋の赤道の南にニューギニア島があります。わたしは少女のころ、この島が怪獣か、わにが横になっているように見えてなりませんでした。そのころ日本は大きな戦争をしていて、この島も戦場でした。

戦後四十年もたった一昨年のこと、わたしは島の東半分が独立したパプアニューギニア国へ行き、五か月間暮らしてきました。

わにはこの国でプクプクといいます。何とかわいらしい名前でしょう。でも大きな川には大きなわにがいて、神さまとされています。この国の貨幣一キナ硬貨の図柄もわにです。

わたしはこのプクプクの国で、現地の人の家族の中にひとりで入り、いろいろ珍しいことに出会いました。心どきどき愉快な探検でした。わにや猛獣と戦った記録ではありませんが、広い世界にはこんな国もあり、こんな生活をしている人がいることを知ってください。

もくじ

はじめに
プロローグ　バリン村のブイさんの家へ　6
十二人の家族　24
太陽と雨のゆたかな恵み　38
カミサマのいる森　54
谷川の水　64
同じ言葉の仲間　75
美しい町マダン　85
国立高校のある町ソゲリ　101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小学校参観　118
美しいサンゴ海　136
月夜のバンブー　145
泣いて別れた人びと　159
滝までの探検　171
シングシングをさいごに　186
あとがき

海岸ぞいの椰子の木。

表紙写真　著者の持っていた紙風船であそぶ子ども。

背カット　わにをデザインしたお金。

撮影　野島千恵子

わに(プクプク)の国どきどき探検記(たんけんき)

ヤラポース村(むら)の住居(じゅうきょ)と子ども。

プロローグ

バリン村のブイさんの家へ

みんなと握手

マダンの町を通りぬけてしばらくすると、舗装されていた道は砂利道になりました。車はそれからずっと山道をのぼり、曲りくねった道の幅はだんだん細くなってきました。

わたしたちはバリン村に向っているのです。標高は八十メートルぐらいのところなのですが、地形がけわしく、ふかい熱帯樹林がつづくので、かなり山の奥という感じがしてきました。しばらく人家も見えず、電柱なんか全然ありません。車の通れる道があるのがふしぎなくらいです。いったいこの奥に人が住んでいるのかしら、そう思ったときでした。

「もうすぐブイさんの家に着きますよ」

と、車を運転している青木さんがいいました。たしかにココ椰子林の間から、

熱帯樹林(ねったいじゅりん)の中を行(い)く。

高床式の家がちらほら見えてきました。
「まあ、登呂遺跡の倉庫みたいな家だわ」
わたしは思わずつぶやきました。静岡県の登呂遺跡に復元保存されてある日本の古代の倉庫と、形がそっくりです。わたしはタイムトンネルをくぐりぬけて、千八百年も昔の弥生時代にたどりついたのでしょうか。まるで自分の祖先のところへ来たようで、とてもなつかしい気持ちがしてきました。
まもなく車がその家の広い庭にはいろうとしたとき、半ズボンだけの男の子が二、三人とびだして来ました。この家の子どもたちなのでしょう。目を輝かせて、口ぐちに「スージィ、スージィ」とさけびながら、わたしたちの車めがけてかけて来ます。わたしはこの国の共通語が、まだよくわかりません。
「何ていっているのかしら」
と、きいてみました。
「ぼくの名前をよんでいるんですよ。この国の人はどうもシュウの発音がむずかしいらしく、ぼくはここでスージィとよばれているんです」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

バリン村でわたしの泊った家。

青年海外協力隊員の青木さんは、修二という名前なのです。マダンのトレーニングセンターで、この国の人びとに二年間トラクターの運転技術などを教えていました。その間に、このバリン村のブイさん一家と親しくなったのだそうです。マダンでの任務が終って日本へ帰ることになった青木さんは、お別れ前に泊りに来ると約束ができていました。わたしは何とか現地の人の家で暮してみたいと思っていましたので、お願いして一緒に連れてきてもらったのです。

車のとまったまわりに、おとなたちも寄ってきました。青木さんが来るのをよほど待っていたらしく、とてもうれしそうです。口ぐちに、よく来たよく来たといっています。

町で見かける人たちはかなりいい身なりをしていますが、ここでは男は上半身はだかで、ラップラップという派手な柄の腰布を、日本の腰巻きのように巻いている人もいます。女はワンピースなどを着ていますが、どの人もみんなはだしでした。

「パパ、日本から来た友達を連れて来ました。チエコ・ノジマです」

ブアイを持ったブイさん。

青木さんは、一家のご主人のブイさんと握手してから、ピジン語でわたしのことを紹介してくれました。ブイさんはこの村の中心になっている人ときいていましたが、たしかに堂々とした体格の立派な顔つきの人です。五十歳はこえているらしく、青木さんはパパとよんでいるのだそうです。

わたしもブイさんと握手をしました。大きな手がわたしの手をきつく握りしめたとき、ブイさんの目がやさしく笑いました。はじめてやってきたわたしのことも、親しくしている青木さんと同じように、よろこんで迎えてくれたのがよくわかりました。わたしもまるで遠い親類に会ったような気がしてきて、その手を握りかえしました。

「ママ、この人もここに泊めてもらえますか？」

青木さんは次に、奥さんのドボグさんと握手しながらいいました。

「どうぞ、何日でも泊ってください」

ママとよばれているドボグさんも、笑顔で答えてくれました。年はよくわかりませんが、ひきしまった体つきで、十一人も子どもを産んで育てた人のようには、

おいしいおいしいココナッツジュース。

とても見えません。わたしは手をさしだしながらいいました。
「チエコ・ノジマです。どうぞよろしく。ママは子どもがたくさんいていいですね。わたしの子どもは二人だけです」
わたしは一生懸命、ピジン語であいさつのけいこをしてきたのです。言葉は通じたようで、ドボグさんも握った手を握りかえしてくれました。さすが何人も子どもを産んだあたたかく力強い手でした。
次は生れて四か月の赤ちゃんを抱いた若いママのソール、男の子たち五人、末っ子の女の子と年輩の男の人たちと、ひとりひとり握手をしていきました。
肌の色は褐色で髪はちぢれ、服装はごく粗末で、水道も電気もない生活をしている人たちです。しかしわたしは、文明のおくれた野蛮人だとはすこしも感じませんでした。親しみのこもったやさしい目、きらきらと輝く瞳からは、肌の色や言葉のちがいをこえて、人の心がじかに通いあう気がしたのです。

ココナッツジュース

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com